

【表題】

高齢層における ICT サービスの利活用に関する定量調査について

【発表者】

水野一成、近藤勢津子、吉良文夫（NTT ドコモ モバイル社会研究所）

【目的】 高齢者において ICT 利活用が拡大しているか、拡大しているのならば、世代・年代・時代効果かを検証する

【対象と方法】 関東 1 都 6 県に在住、60・70 代を性年齢及び居住地の都市規模に応じて割付、訪問留置法を用いて実査、調査時期 2018 年 1 月と 2023 年 1 月

比較対象者①2018 年 60 代前半（男 62 女 64）と 2023 年 60 代後半（男 65 女 67）②2018 年 60 代後半（男 78 女 81）と 2023 年 70 代前半（男 74 女 82）③2018 年 70 代前半（男 60 女 65）と 2023 年 70 代後半（男 54 女 65）をそれぞれ男女で検証。ICT 利活用は①ICT を利用した代表的な 8 つのサービスの利用有無②コミュニケーションを目的とした ICT サービスの利用の有無と利用したことによる人との繋がりの変化を測定

【倫理的配慮】 当調査は調査員が被験者に対し、調査内容の説明等を実施し、承諾を得た方のみに回答を依頼

また調査実施については当研究所の所長の承諾を得ている。

【結果】 性年代を問わずに多くの ICT サービスで有意に利用率が上昇した。8 サービスを因子分析したところ、比較的利用者の多い情報検索等基本サービスにおいて、特に上昇が大きかった。

コミュニケーションに関するサービスは LINE が全性年代ともに有意に上昇。人との繋がりの変化については、因子「深化」に関する設問が 70 代後半で有意に上昇した。

なお、スマートフォンの所有率は全性年代で上昇、パソコンは 60 代後半及び 70 代前半の女性で有意に減少した。

【考察】 この 5 年間で世代効果以上に、ICT サービスは有意に利用が拡大したことを確認。ただ、その間サービスの改善も行われていることから、時代効果も合わせて影響したことが推察される。またコミュニケーションに関しては、LINE の上昇が見られたがメールとの入れ替わりという面があり、人との繋がりの変化は限定的であった。